Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-04

第二言語（L2）アクセントの受容への影響 ： 先行研究のレビュー

田中, 順子

(Citation)
近代,117:69*-83*

(Issue Date)
2018-02

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010147

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010147

第二言語（L2）アクセントの受容への影響
―先行研究のレビュー

田　中　順　子

1. はじめに

1.1　研究の背景

筆者はカナダのトロント市に長年居住し、15年ぶりにトロント市で3ヶ月間過ごす機会を2014年に得た。以前居住していた時に比べると訛りのある英語を話す人が増えており、さらにハイステイク（high-stakes）な専門職に就く職業人にも英語に訛りがある人が増えているように感じた。ここでいうハイステイクな職業とは、コミュニケーションの成功や大きな失敗が利益や損失に結びつく職業を指す。具体的には、銀行の窓口（wicket）業務につくテラー（teller）ではなく、銀行の中にオフィスを構えている投資コンサルタントのような職業が挙げられる[1]。また、テレフォンバンキングやクレジットカードのヘルプデスクのようなコールセンターで音声だけで仕事をする人たちも該当する。このようなハイステイクな職に就く人たちも含めて訛りのある第二言語（L2）としての英語を話す人に頻繁に遭遇することがあり、むしろ訛りがない人に遭遇することの方が少ないと思われるほどであった。

このような訛りのある英語を話す人口の増加は、カナダへの移民のここ15年の属性の変化を考えると当然のことかもしれない。1871年から2011年までのカナダ移民の出身国調査（Parkinson, 2017, p. B9）によると、英国諸島（British Isles）と米国からの移民が占める割合が1991年は約75%で、2001年は約60%であった。それが2011年では約13%に激減している。2011年から7年が経過した現在では、米国や英国諸島出身の移民（その多くは英語を母語とする者）の減少傾向は顕著であろう。1年あたりの移民の受け入れ人数自体は横ばいか、

あるいは増えていることから、英語を母語 (L1) としない移民が全人口に占める割合が大幅に増えていることは容易に推測できる[2]。訛りがある英語を話す人口自体が増えていることや、そのような訛りのある英語話者が従来は就いていなかったようなハイステイクな仕事に進出していることが、15 年ぶりのトロント滞在において訛りがある英語話者が増えたと感じた理由であろう。

1.2　北米でアクセントがある英語を話すことの結果

英語が公用語の一つであるカナダや実質的な公用語であるアメリカにおいて、訛り（今後はアクセントと呼ぶ）がある英語を話すことはどういう意味を持つのであろうか。この問題についてアクセントのある英語の許容度がカナダに比べて低く、アクセントがあることに関わる訴訟の事例が多いと思われるアメリカを例に考えてみよう。

英語にアクセントがあることによって英語能力を判断されるのであれば理解できるのだが、Lippi-Green（2012, p. 38）によると、話者に関する言語能力以外の背景情報についても推測され、評価（値踏み）がされ、“We perceive variation in the speech of others and we use it to structure our knowledge about that person（Lippi-Green, 2012, p. 38）.”ということが起こる。また、英語にアクセントがあることによって発話の明確さが要求されるような職に就く事が難しくなる。Matsuda（1991, p. 1369）は、言語が職業に影響を及ぼす度合いの指標として次の 4 項目を挙げている。

⑴ The consequences of miscommunication are grave.

⑵ Giving and receiving oral communication are substantial part of the job.

⑶ The speech interactions are under high stress, where time is of the essence, increasing probability of miscommunication.

⑷ The interactions are typically one-time calls, such that the caller has little time to adjust in listening and comprehension patterns.

上記の4つの指標に基づき、言語が職業に影響を及ぼす度合いが最も高い職業として、Matsuda（1991）は 911（日本の 110 や 119 に相当する緊急電話番号）のオペレータ職を挙げている。先に述べた銀行の投資コンサルタントや金融関係のコールセンターの例は、短い時間で接触が行われるという点と、命に関わりはしないが、コミュニケーションの失敗が金銭的な損害につながりうることから「ステイクが大きい」職であると言えよう。

このように、北米特にカナダで顕著なアクセントがある L2 英語話者が増加し、ハイステイクな職業従事者にもいるということを、英語母語話者や移民として渡って来て長年北米に在住している L2 英語話者のオールドカマー達はどのように捉えているのかであろうか。上記の北米での動向は、日本での L2 日本語話者の増加や L2 英語を使っての接遇の必要性の増加といった現在日本で起こっている現象ともリンクする。L2 日本語話者は現実に様々な職場に出現しており、中国語やベトナム語を L1 とするコンビニ店員やスーパーのレジ係に遭遇することは特に都市部では珍しくない。このような傾向は政府の高度人材（移民）受け入れ促進の姿勢から判断しても今後も続いていくと考えられる[3]。L2 日本語話者の話す L2 日本語を L1 日本語話者としてどう受容するのか、どの程度の L2 日本語であれば彼らが就業している業種の職業人として妥当であるのかについて考える必要が出て来るであろう。

その一方で、L2 英語を使っての接遇の必要性は、従来はビジネス（会社間での商談）場面を中心に起こると考えられていたが、現在では必ずしもそうではなくなっている。増加する訪日観光客への対応が必要とされる状況において、従来は L2 英語を必要としなかった業種の就業者が L2 英語を使う機会が増えている。百貨店やドラッグストア等の小売店の店員が、また地下鉄などの公共交通機関の職員が、L2 英語を使って接客している場面に遭遇するのはもはや珍しいことではない。このような L2 英語を使う状況がビジネス場面以外で増えていることへの対応であろうか、NHK の「しごとの基礎英語」では 2017 年 10

月からビジネス場面ではなく、訪日外国人に町や店で応対する場合の英語使用場面を取り扱っている[4]。このような動向を受けて、筆者はL2英語話者として、またL1日本語話者として、どのようにL2言語使用とその受容を捉えるべきかを考えるようになったのである。

1.3 本論文の目的

1.2で述べたような状況がある限り、L2が何語であるかに関わらず、サービス提供者としてのL2発話と、L2発話のL1話者による受容について今後検討する必要がある。そのために、L2発話の受容に関わる諸要因について先行研究をもとに探るのが本論文の目的である。また、その結果として今後のL2教育に向けた示唆を得る事も目的とする。

従来から、L2習得において習得困難な項目として挙げられていたのがL2の形態統語（morphosyntax）の獲得とL2の音声面での習得である。これらは、L2学習者が当該言語の母語話者と同等の言語能力を習得しているかどうかを評価する際の指標としてL2習得研究において広く使われている。筆者は前者について研究を行っているがL2音声の習得は専門ではない。しかし、L2音声の習得もL2習得困難項目として非常に興味深いものがあるため、カナダでの経験もあり、この問題について検討を試みることにした。1.2ではL2英語の使用とL2日本語の受容について言及したが、本稿ではL2話者の英語をL1英語話者がどのように捉えるのかに限定し、特にL2音声面の中でもL2英語発話中のアクセントの有無と、L2英語発話の理解のしやすさに着目する。L2英語発話の受容には様々な要因が関わるが[5]、本稿では言語学的な要因に限定し、L2英語アクセントの評価についての二つの実証的研究を中心にレビューする。なお、本稿で行うのは網羅的なレビューではないことを予め述べておく。

2. なぜアクセントが問題なのか

L2 習得研究では、L2 学習者が到達した究極の状態（ultimate attainment）がどのようなレベルであるのかに関心をおき、L2 習得の最終地点に到達しているかどうかを問題として来た。その究極の状態のあるべき姿として母語話者の能力を据え、また最終地点に到達しているかどうかは当該言語の母語話者の能力を規範として比較検討されてきた。最終地点への到達についての研究において、また特に大人の L2 習得研究において、題材としてよく使われるのが上述した L2 形態統語と L2 音声の習得である。これは L2 形態統語や L2 音声の習得が困難であったため、これらの項目が L2 話者と当該言語の母語話者を識別するのに有効であったためである。

L2 習得研究の対象としての形態統語とアクセントは、L2 習得研究では題材としてよく採用されて、先行研究が多いことが共通点として挙げられる。一方で、L2 習得研究の対象として共通していない点としては、どの程度言語学習適性（持って生まれた能力で、経験や学習といった後天的な要因により変化しない）が関係しているのかについて、形態統語についてはよく研究されているが、音声面での習得についてはあまり研究されていない（Saito, 2017）ことである。

L2 受容の研究面でアクセントに着目するのは次の理由による。一般的に人は訛りについて敏感であり、一般人でも捉えやすい（Derwing & Munro, 2009, p. 477; Lippi-Green, 2012, p. 151）。ところが、アクセントがある L2 発話の客観的な評価は実際には困難である。人は L2 発話を聞くだけで話者の特徴を特定できると考えがちであるが（Derwing & Munro, 2009, p. 477）、Matsuda（1991）が“Evaluation of accent is particularly susceptible to bias and distortion... Without some experience in speech evaluation, the lay listener is likely to err―often on the side of negative stereotypes.（p. 1372）”と述べているように、アクセントのある発話は正当に判断されないことがままある。また、アクセントが発話内容

の理解を阻んでいない場合でも、アクセントの存在により L2 発話の評価が下がったり、就職の際にアクセントの存在が障害となるなどの実際的な問題に結びつくことが少なくない。

3. L2 アクセントに関わる最近の研究

L2 発話の評価において、アクセントが理解にどのような影響を与えるのかについて、最近の実証的な研究結果を検討する。L2 英語話者の話す英語が L1 英語話者によって評価される場合には、その評価にどのような言語的側面が関わっているのであろうか。これらの問題に関係する Trofimovich & Isaacs（2012）の研究内容について以下で検討する。

3.1　L2 英語スピーチ評価に関わる言語的側面

Trofimovich & Isaacs（2012）は L2 英語話者の話す英語の評価にどのような言語的側面が関わっているのかについて実証的な研究をおこなった。この研究の参加者は L1 がフランス語であるカナダ在住の L2 英語話者の大学生 40 人である。彼らに 8 フレームからなる絵を見せて、そのストーリーを L2 英語で話してもらい録音したものを評価の題材とした。

評価者には L2 英語に接触したことがない素人評価者と L2 英語との接触が多い者を起用した。素人評価者として、L1 英語話者でフランス語の知識が乏しいカナダ在住の大学生 60 人（専攻は言語学ではない）を採用した。評価の観点は「アクセントの有無（accentedness）」と「理解のしやすさ（comprehensibility）」で、9 段階で評価した。L2 英語との接触経験がある評価者として、3 人の英語母語話者である英語教師にも評価を依頼した。「アクセントの有無」はスピーチサンプル（評価の題材）の話者の英語が北米英語からどれくらい異なっているかに基づいて判断され、「理解のしやすさ」はどれくらい L2 話者の英語が理解しやすいかに基づいて判断された [6]。

L2 話者の発話を評価するにあたり、エラーが19の言語学的観点に基づいてコード化され、大きく(1) Speech measures, (2) Fluency, (3) Lexis/Grammar, (4) Discourse の4つに分類された[7]。19観点についての量的な評価に加えて、英語教師が自由形式で評価コメントを付けた。これらのデータを用いて、ピアソンの相関分析、重回帰分析、ステップワイズ法による量的分析を行い、また英語教師のコメントの質的分析を行った。

分析の結果、「アクセントの有無」と「理解のしやすさ」については、この二つはオーバーラップしているところがあるものの、それぞれが異なる構成要素（音声面、流暢さ、語彙、文法、談話）の組み合わせからなることがわかった。アクセントの有無については、文節単位での正確さが聞き手のアクセントの有無の判断に関わっているが、文節単位での正確さが理解のしやすさに関与する度合いは、それがアクセントの有無の判断に関与する度合いに比べると低かった。

文法エラーや語彙エラーは、聞き手がスピーチの内容に注意を払うことへの阻害要因になるため、理解のしやすさに関係する。その一方で文法エラーや語彙エラーは、理解のしやすさへの関与に比べて、アクセントの有無への判断への関与は低いことがわかった。アクセントの有無と理解のしやすさに関与する要因が異なることは、量的分析結果だけではなく、小規模の質的分析結果においても裏付けられた。

3.2　L2 言語の音の習得と言語学習適性との関係

L2 言語の音の習得に言語学習適性の関与する度合いが高いならば、後天的な学習によってL2 言語の音を習得することは難しいことになる。本節ではまずL1 での音声習得とL2 での音声習得について比較検討を行い、次に習得が難しいと言われているL2 言語の音の習得に、L2 学習者が生まれ持つ言語学習適性がどのように関わっているのかに関する先行研究をレビューする。

新生児は生まれながらにあらゆる音を聞き分ける能力を持っているが、新生児の周りでケアテーカーが話すL1の音を聞くことを通じて、生後6ヶ月から12ヶ月の間にL1以外の音（外国語の音）を聞き分ける能力を失うと言われている（Kuhl, 2003, p. 9096）。生後12ヶ月でL1の意味の識別に関係しない音（L1でphonemicではない音）を識別しなくなるとすれば、L2習得においてL2の音の特徴の識別が困難であることは納得ができる。では、一度識別をしなくなった音をL2で識別する必要がある場合に、L2学習者は学習によって後天的に識別ができるようになるのであろうか。

Flege（2016）は、“…learners of any age, even late learners, retain the capacities used in successful L1 speech learning, including the capacity to create new phonetic categories for certain L2 sounds…（スライドp. 4）”と述べている。これは、少し乱暴なたとえかもしれないが、L2習得、特に文法習得に関しての普遍文法（Universal Grammar）の役割に関する三つの立場のうちの二つの立場を彷彿とさせる。一つは、L1習得後のL2学習において普遍文法（Universal Grammar）がL1習得前のままの状態（intact）で存在しており、その完全体の普遍文法がL2習得の際に機能するという考え方（full access）である（e.g., Schwartz & Sprouse, 1996）。もう一つは、完全体としての普遍文法ではないが、既に習得したL1を通じて部分的に普遍文法にアクセスすることが可能であり、L2習得には部分的に普遍文法が機能するという考え方である（partial access）（e.g., White, 1989）。一方、L1習得に関与した普遍文法は、L2習得の際にはアクセスすることができなくなっている（no access）という考え方もあるが、これは上記のFlege（2016）のL2音の習得についての仮説とは相容れないことになる。

3.3　L2の創出と言語学習適性の関係

Saito（2017）は、教授を通じて外国語環境下でL2英語を学ぶ学習者について、

言語学習適性と L2 英語の音の創出能力との関係性を実証的に検討した。参加者は日本の大学で英語を学ぶ大学生 50 名（18 歳から 19 歳）で、実験参加時の英語能力の平均値は TOEIC で 653.4 であった。参加者全員が日本語の母語話者で、英語を 7 年間学習し、L2 英語を海外で学習した経験は全くなかった。

Saito（2017）では、言語学習適性を測る方法として LLAMA テスト（Meara, 2005）が使用された。LLAMA はコンピュータ上で行える言語学習適性テストで所要時間は 30 分ほどである。Saito の研究では LLAMA D（音を聞いてその音を認識する能力）、LLAMA B（新しい語彙の綴りを習得する能力）、LLAMA E（新奇な音とその表象とを結びつける能力、音素のコード化能力）、LLAMA F（文法感受性）を使用した。

L2 英語の音の創出能力を測るために、絵をみてその内容を L2 で話すタスク（picture narrative）を行い L2 英語を自由創出させた。参加者の創出した L2 英語のスピーチは、言語学のトレーニングを受けた英語母語話者によって、以下の三つの観点に基づいて主観的に評価された。三つの評価の観点とは、(a)セグメント・エラー（置き換え、省略、子音や母音の挿入）、(b) 語の強勢（強勢の位置の誤り、第一強勢の消失）、(c)イントネーション（ピッチを適切に変化させているか）であった。

参加者の LLAMA の各セクションのスコアと、英語母語話者による参加者の L2 英語発話の評価を統計的に分析した結果、L2 学習者の音素コード化能力（LLAMA E で計測）は発音の正確さ（$rho = .40$, $p < .01$）、語の強勢（$rho = .28$, $p = .04$）、イントネーションの正確さ（$rho = .30$, $p < .03$）と有意な相関があることがわかった。また、記憶および関連付け能力（LLAMA B）は流暢さと、言語分析能力（LLAMA F）は語彙の豊かさと、有意な相関があることがわかった。

上でも述べたように、L2 の音と形態素を正確に創出する能力は L2 習得の中でも習得困難であるとされている。しかし、教室環境下での L2 学習であっても、

言語学習適性が高いL2学習者は音素コード化能力を使ってL2の音を正確に創出できることがわかった。また、言語分析能力のおかげで洗練された語彙を使用でき、記憶および関連づけ能力によって複雑な構造の発話を速く創出することができていた。一方で、潜在的学習に関わる適性（例えば音の認識に関する適性）は、大人の教室内での外国語学習にはあまり関わらないということが分かった。

このSaito（2017）の研究結果から、外国語環境でのL2英語学習者の中でも、音素コード化に関わる言語学習適性が高い者が、L2発話においてL2音の創出が正確にできる傾向があると言えよう。L2音の習得と言えば潜在的学習の適性が関与していそうなものであるが、潜在的学習の適性とL2音の正確な創出との関係性は見いだせなかった。これは一見意外な結果であるが、外国語学習環境下では、L2音の正確な創出については、音の認識に関わる潜在的学習の適性ではなく、音素コード化に関わるような分析的な能力が関わっていることになる。しかしながら、L2インプットが豊富なL2習得環境下で長くL2習得が行われるような場合には、L2発話の評価と潜在的学習に関わる適性が関連する可能性がある（Saito, 2017, p. 686）[8]。

3.4　L2発音指導

これまでに述べたようなL2言語の音の習得に関わる研究の結果を受けて、本項では簡略ながらL2発音指導への示唆や、指導の方向性について検討を試みる。

Derwing & Munro（2009）は、これまでのL2発音指導の傾向としては、第一にオーディオリンガリズムの衰退とともに発音研究とL2発音指導が脚光を浴びなくなり、第二にL2音声習得の到達目標がネイティブレベル（母語話者レベル）に置かれておりそこに到達することが到底困難であるために発音指導は効果的でないと考えられてきたことを挙げている。その一方で、昨今のL2

発音指導には変化が起こっており、これは、L2 習得の到達目標を母語話者レベルではなく、「聞き手に分かってもらいやすくする」ことにおく方向にシフトしていると述べている（pp. 481-482）。以前のように到達がほぼ不可能な高い目標を設定を行い、その目標が高すぎるためにその目標に向かって発音教育する事が無用だと感じさせるのではなく、L2 発音教育を行うことは意義があると考えられる様になってきたと言えよう。

4. 結語

4.1　コミュニケーション最重要視の L2 英語教育の今後

1980 年代のインプット仮説（Krashen, 1982）の興隆に始まるコミュニケーション重視の L2 教育が実践の場に行き渡り、L2 の発音や強勢の位置の指導といったボトムアップ的な教育にあまり時間をかけなくなったことが長く続いたことによる悪影響が昨今見受けられる。比較的偏差値が高いと考えられている大学の新入生でも、語レベルに限っても強勢の位置を間違わずに正しい音で L2 単語を発音できない学生が少なくない。L2 英語のコミュニケーションでの運用能力の向上が重視されてはいるものの、細かな部分についてはあまり留意していないのではないかと思われる。

4.2　L2 英語学習でのゆりもどしの必要性

3 でも述べたが、Trofimovich & Isaacs（2012）の研究結果から、セグメント単位での正確さが聞き手によるアクセントの有無の判断に関わることが分かっている。また、Saito（2017）の研究から L2 英語を教室で外国語として学習する場合には、音素コード化に関わる言語適性の高い学習者が、L2 発話における L2 音の創出が正確にできる傾向が見られた。これら二つの研究結果から、外国語環境で英語を学習している日本の英語学習者の L2 発話音声がポジティブに受容され評価されるようにするためには、セグメント・エラーを防止

するべく語中の音や強勢の位置を正しく発音するように留意するべきである。また、分析的能力を生かして音と綴り字の結びつきを強めるようにすることが望ましい。これらは日本でのL2英語の運用能力を開発する方法の一つであると言えよう。

コミュニケーション重視の教育が進んだことで、文法指導や発音指導などのボトムアップ的な教育に充当する時間が減ってきているようだが、そろそろ「揺り戻し」が必要な時期ではないだろうか。かつて、英語教育の時計の振り子がオーディオリンガリズムに振り切った後で、コミュニケーション重視の英語教育の方に揺り戻しが来たことがあった。現在は、コミュニケーション重視の英語教育から逆の方向へ、「ボトムアップ面にも」留意する教育の方向へと、過度ではなく、少し揺り戻しが来ても良い頃ではないかと筆者は考える。揺り戻し後にどのような変化がL2英語授業に起こり、その成果が実証的に捉えられて評価されるのかに期待している。

注

1　訛りが第二言語（L2）話者の話す内容の真偽判断にも影響するという研究報告がある（Lev-Ari & Keysar, 2010）。実際に筆者は、訛りのあるL2英語を話す専門家との最初の接触では、その人の専門家としての能力を疑問に思ったことがある。しかし、2回目の接触において訛りに関わらず能力がある人だと判断することができた。これは訛りが話者の能力や発話内容の真偽の判断に影響を及ぼしかけた事例であるが、このように2回以上遭遇する機会を得て訛りによる誤解を解く機会があるとは限らない。なお、訛りの真偽判断への影響については影響しないという研究もあり（例えばSouza & Markman, 2013）、未だ見解が一致していない。

2　トロント等の都市部を擁するオンタリオ州やブリティッシュ・コロンビア州においては、人口に移民が占める割合はカナダ全土の統計値よりも大きい。

3　高度人材受け入れ以外にも、北米では移民がよく従事する職であると考えられているタクシー運転手に、日本でもニューカマーの外国人を積極的に登用しようとする動きが見られる（産経ニュース , 2017）。

4　「5年目を迎える『しごとの基礎英語』。10月からは装いを新たに内容を一新！舞台は

これまでの"オフィス"から訪日外国人に対応する日本各地の観光地やお店などに移ります。」（日本放送協会, 2018）との説明がつけられていた。

5　言語学的要因以外でL2英語発話の受容には次のような要因が関わりうる。

・視覚的要素（肌の色、服装などの外貌）

・共通認識の有無や共通知識の度合い

・L2話者のL1そのものと、そのL1の話し手への、聞き手の態度（心的態度も含む）

6　評価に先立ってL2話者の発話に表れたエラーのコード化がなされた。40名によるL2英語のスピーチのそれぞれについて、トレーニングを受けた1人のコーダーがL1英語話者としての直感に基づいてコード化し、トレーニングを受けた別のコーダー1人が、同様に直感に基づいて全スピーチサンプルの40%をコード化した。両者がコード化した結果の一致率は.90で、語彙エラーについてのみ.85であり、コード区分の決定が妥当であることが示唆された。

7　19の言語学的観点については以下のとおりである。

スピーチ（Speech）

⑴　文節エラー（segmental errors）

⑵　音節構造エラー（syllable structure errors）

⑶　語強勢エラー（word stress errors）

⑷　リズム（rhythm）

⑸　ピッチコントアー（pitch contour）

⑹　ピッチレンジ（pitch range）

流暢さ (Fluency)

⑺　uh, er等を伴うフィルド・ポーズの総数（total numbers of filled pauses）

⑻　沈黙の総数（total numbers of unfilled［silent］pauses）

⑼　ポーズエラー（pause errors）

⑽　繰り返し／自己修正（repetitions/self-corrections）

⑾　発話レート（articulation rate）

⑿　発話の長さの平均（mean length of run［MLR］）

語彙／文法（Lexical/Grammar）

⒀　文法エラー（grammatical errors）

⒁　語彙エラー（lexical errors）

⒂　語の出現頻度（token frequency）

⒃　異なり語の出現頻度（type frequency）)

談話 (Discourse)

⒄　物語の結束性（story cohesion）

⑱ 物語の広がり（story breath）

⑲ 物語の深さ（story depth）

これら4つの分類には、セグメンタルレベル（文節レベル）とスープラセグメンタルレベル（文節を超えたレベル）のエラーが混在している（Trofimovich & Isaacs, 2012, pp. 908-909）。

8 これは DeKeyser（2000）の研究結果において、L2 英語学習者の米国到着時年齢が16歳以前の場合には、言語学習適性の高低と L2 文法能力テストとの有意な相関が見られず、ほぼ全員が母語話者並の能力を示した結果とも合致しており興味深い。

引用文献

DeKeyser, R.（2000）. The robustness of critical period effects in second language acquisition, *SSLA, 22,* 499-533.

Derwing, T. M., & Munro, M. J.（2009）. Putting accent in its place: Rethinking obstacles to communication. *Language Teaching, 42,* 476-490.

Flege, J. E.（2016）. *The role of phonetic category formation in second language speech acquisition.* The Eighth International Conference on Second Language Speech, 10 June, 2016, Aarhus University, Denmark. http://jimflege.com/files/Flege_Aarhus_talk_20162.pdf（2017.12.20）

Krashen, S. D.（1982）. *Principles and practice of second language acquisition.* Oxford：Pergamon Press.

Kuhl, P., Tsao, F.-M., & Liu, H.-M.（2003）. Foreign-language experience in infancy: Effects of short-term exposure and social interaction on phonetic learning. *PNAS, 100*（15）, 9096-9101.

Levi-Ari, S., & Keysar, B.（2010）. Why don't we believe non-native speakers? The influence of accent on credibility. *Journal of Experimental Social Psychology.* doi：10.1016/j.jesp.2010.05.025

Lippi-Green, R.（2012）. English with an accent: Language, ideology and discrimination in the United States（2nd ed.）New York: Routledge.

Matsuda, M. J.（1991）. Voices of America: Accent, antidiscrimination law, and a jurisprudence for the last reconstruction. *The Yale Law Journal, 100*（5）, 1329-1407.

日本放送協会（2018）. https://www2.nhk.or.jp/gogaku/english/jobkiso/（2018.1.4）

Parkinson, D.（2017）. As boomers go, newcomers are the answer. *The Globe and Mail,*

February 18, B8-B10.

Saito, K.（2017）. Effects of sound, vocabulary, and grammar learning aptitude on adult second langauge speech attainment in foreign language classrooms. *Language Learning, 67,* 665-693. doi:10.1111/lang.12244

産経ニュース http://www.sankei.com/economy/news/170918/ecn1709180005-n1.html（2018.1.9）

Schwartz, B. D., & Sprouse, R. A.（1996）. L2 cognitive states and the full transfer/full access model. *Second Language Research, 12,* 40 – 72. https://doi.org/10.1177/026765839601200103

Souza, A. L., & Markman, A. B.（2013）. Foreign accent does not influence cognitive judgments. *Proceedings of the 35th Annual Meeting of the Cognitive Science Society,1360-1365.* Retrieved from https://mindmodeling.org/cogsci2013/cogsci2013_proceedings.pdf（2017.12.28）

Trofimovich, P., & Isaacs, T.（2012）. Disentangling accent from comprehensibility. *Bilingualism: Language and Cognition, 15,* 905-916. https://doi.org/10.1017/S1366728912000168

White, L.（1989）. *Universal grammar and second language acquisition.* Amsterdam: John Benjamins.

（たなか・じゅんこ　第二言語習得論）